

京都府におけるウスメバルの漁業実態 (紹介)

田 中 雅 幸
中 西 雅 幸

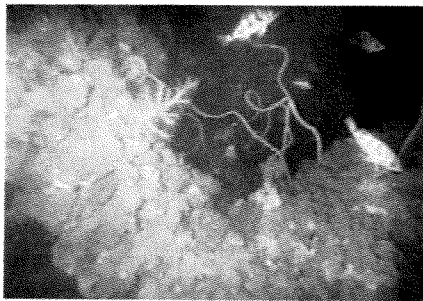
ウスメバルは、日本海側では函館から対馬海峡付近まで生息している冷水性のメバル類の1種である。ウスメバルの漁業実態や資源生態に関する報告は、海域別にみると、新潟県西部海域(鈴木他, 1978)、青森県日本海側海域(涌坪・田村, 1983)さらに対馬暖流域と能登半島以北海域(池原, 1989)など日本海北部から中部海域に集中していて、日本海西部海域での調査事例はほとんど見当たらない。京都府沿岸海域においては、ウスメバルは「ムギ」又は「コムギ」と呼ばれ、肉質は硬く、非常に美味しいことから、市場単価はkg当たり2千円以上あり、沿岸海域での重要な釣対象魚種となっている。また、遊漁の対象魚種としても注目されるようになった。しかし、近年、漁業者から「釣れなくなった」、「魚体が小型になった」など資源量の減少を示唆する話が聞かれ、生態的知見に基づいた資源管理の必要性が高まってきた。そこで、著者らは1996年4月から京都府沿岸海域でのウスメバルの漁業実態や生態を明らかにする調査研究を実施してきた。その中で、ウスメバルの一本釣り漁業者を対象にした聞き取り調査を実施し、ウスメバルの漁業実態について取りまとめたので紹介する。

調査方法

ウスメバル漁業に関する漁場、漁具・漁法、操業時間および漁期を知る目的で、1996年4月に蒲入、下宇川および浜詰浦漁業協同組合に所属する漁業者および組合職員を対象として聞き取り調査を行った。漁獲量および漁獲金額については、京都府漁業協同組合連合会が取りまとめている1990年から1996年の統計資料を利用した。また、資源の状況を推定するために、蒲入漁業協同組合に残されていた1990年から1995年の個人別売り上げ伝票から1日・1隻当たりの漁獲量、すなわちCPUEを月別に計算した。

1 漁 場

1950年代以前のウスメバル漁業に関する情報は得られなかったが、1960年以降には、経ヶ岬以西の下宇川沖合のオキノクリから浜詰浦地区の沖合のテンバグリやシモグリにかけての天然礁周辺海域においてウスメバルが一本釣りで漁獲されていたようである。当時、この地区では動力船を用いた漁業は行われていなかったため、約7km沖合の天然礁まで出漁するには、小型船を数隻横に連ねて、あたかも一隻の大型船のように仕立て、数人で櫓を漕がなければならなかったようである。漁場に到着した後、連ねていた船をそれぞれに切り離し、各自の得意とする場所で釣りを行っていた。漁場の主体は、水深120m前後海域に点在する礁であったが、まれには、水深80m以浅の礁場も漁



場として利用されていたようである。当時は魚探などの近代的な設備はなかったため、各自が経験と勘で捜し当てた好漁場を「やまみ」で記憶しておくなどして、漁業者それぞれが得意とする漁場を持っていたようである。

1970年代の後期になると、経ヶ岬以東の浦入地区においても釣りの技術が導入され、ウスメバル漁業が実施されるようになった。また、この頃には、動力船の導入も進み、出漁は個人毎に行われるようになってきた。さらに、漁船の機動力が向上したことに伴って、漁場も水深130mから160mの浦島礁周辺海域へまで拡大していった(図1)。

近年では、ウスメバルの資源量の減少によると思われる漁場の縮小傾向が認められている。すなわち、1980年代の主漁場であった下宇川から浜詰浦沖のテンバグリやシモグリなどの天然礁においては、主漁期の4月から6月頃を除くと、ほとんどウスメバル漁業が行われなくなり、現在では経ヶ岬沖から浦島礁周辺の水深110m以深のごく限られた海域が漁場として活用されている。

2 漁具・漁法

京都府で水揚げされるウスメバルの大部分は一本釣りで漁獲されている。ウスメバルを対象とする一本釣り漁具は、昔から一般的には、釣糸の最下部に沈子を付け、その上方に等間隔に枝針を何本も付けられたものであった。枝針には普通、漁業者自らが鳥の羽などを材料として、経験と勘で養った色や形に仕上げた擬餌針が用いられた。なお、漁業者が実際に使用する擬餌針の種類や枝針の間隔は季節や漁場、漁獲状況などによって変えられ、天候や流れなどの海況状況にあった擬餌針を選択できるかが漁獲量を大きく左右する。

1980年頃までは、付けた全ての擬餌針にウスメバルが掛かることも珍しくなく、1漁具当たり10kg以上の漁獲があり、海底から30~40mも上方の擬餌針でも釣れたこと

から、枝針間隔は40~50cmと広く、60~100本と針数も多くする傾向があった。しかし、近年では一度に掛かる魚の数が減ってきたことと、海底付近でしか釣れなくなったことから、枝針間隔は20~30cmと狭くなり、針数もかなり減って30~40本が使用されている(図2)。また、近年では、擬餌針だけでは釣れない場合が多くなり、ホタルイカやオキアミなどの餌を付けて操業することも多くなっている。

本種の本一本釣りの場合には、船を固定しない流し釣り方式であり、漁具が正確に礁の潮上に投入されないと漁獲は期待できない。近年では魚探が普及しているため、魚群反応によって漁場や漁具の選択が可能になったが、水深100m以深の礁の潮上に正確に漁具を投入するには、潮の流れや風等の条件を考慮する高度な技術が必要となっている。

3 操業時間

1970年頃のウスメバル一本釣りは、一般的には夜明けと共に最初の漁具を投入し、昼までの6~7時間が主な操業時間帯であった。また、ウスメバルは早朝の短時間に良く釣れる「朝まずめ」が認められ、夜明けからの2~3時間で、その日の漁獲量が左右されていたようである。当時の漁業者の目標は、午前中に80kg以上を釣り上げることであり、午後からの操業はあまりしなかったようである。近年でも、ウスメバルは早朝の「朝まずめ」に良く釣れるので、漁業者は夜明けまでに漁場に到着して、夜明けと共に操業を開始している。浦島礁周辺の主漁場までは、3~4tの小型漁船で約1~1時間30分を要するので、春から夏にかけては午前3時頃に出港し、漁場到着後に魚群探知機で魚群を探していると夜明けになるという経過である。近年は1980年代に比べて漁獲量が減少してきたことから、午前中だけの操業では漁獲量が少なく、午後からも操業するよ

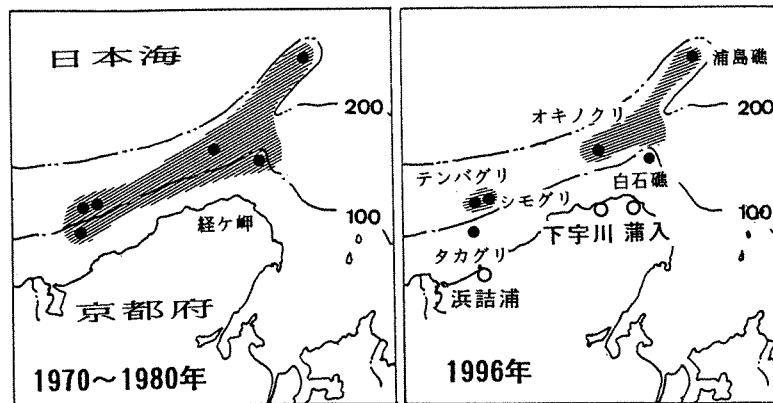


図1 漁場

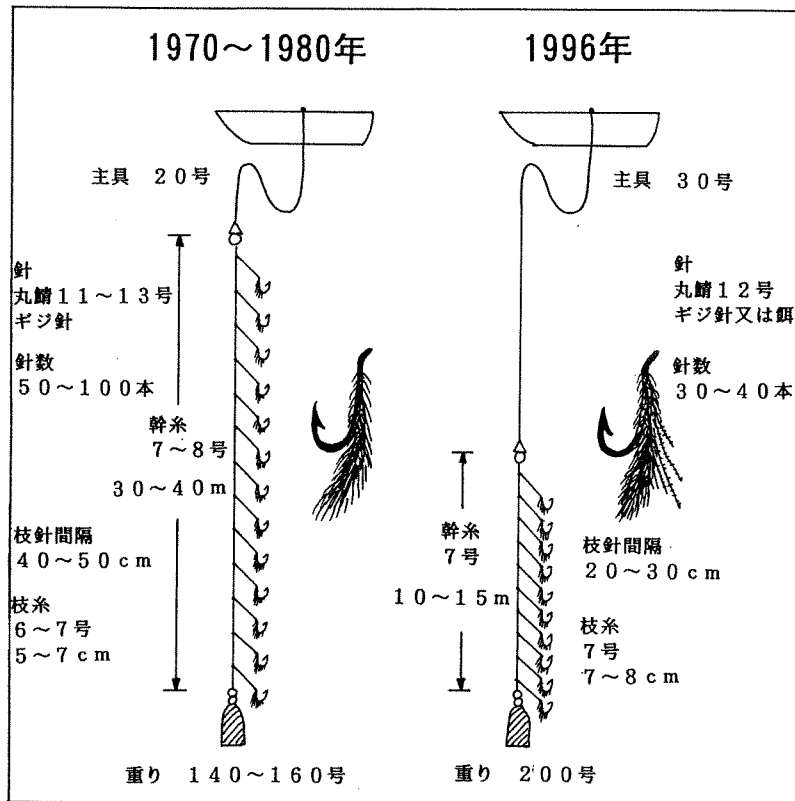


図2 ウスメバルの一本釣漁具

うになった。漁業者の帰港時間は、漁獲物の集荷が行われる16~17時頃であり、港から漁場までの往復時間を除いた実操業時間は9~10時間以上になっている。

4 漁 期

ウスメバルの一本釣りは、ほぼ周年おこなわれており、その主漁期は3~6月である。冬季にも出漁すればウスメバルは釣れるが、荒天等のために出漁する機会は少ない。3月上旬に、礁周辺でウスメバル特有の魚探反応が現れると漁期が始まり、浅場の漁場で小型の個体を中心に漁獲される。漁期初めは、水深140 m以深の深い漁場ではあまり釣れないので水深130 m以浅の漁場が中心となるが、深い漁場で釣れる魚体は大型である。同一漁場では、ほぼ同じサイズのウスメバルが釣られ、時期や日によってそのサイズは変わる。1996年に京都府沿岸の一本釣りで漁獲されたウスメバルの大きさは、体長18~24 cmを主体に、体長15~34 cmの範囲であった。近年は漁獲量が減少し、漁獲サイズも小型化してきているようである。漁獲したウスメバルは、発砲スチロールの箱に、大きさ別に並べて出荷され、市場では体長20~25 cm程度の中型個体の単価が最も高く、kg当たり2,500~3,000円(1996年)で取引

されている。

一本釣漁業を営む漁業者は、周年ウスメバルを主対象にしているのではなく、他の漁獲対象種(ブリ、アマダイ、タチウオ等)の主漁期には、水深50~100 mでの一本釣りや延縄および曳釣を行っている(表1)。また、ウスメバルの一本釣りをやっているが、他の漁場でブリ等が好漁であれば、漁具を交換してブリ釣りに切り換えることもある。

5 漁獲量および漁獲金額

京都府におけるウスメバルの漁法別漁獲量および漁獲金額を図3に示した。1990~1996年の京都府全体の漁獲量は12.5~20.8 tで、漁獲金額は2,400~3,600万円であった。そのうち一本釣漁法による漁獲量は10.6~18.2 tで、漁獲金額は2,200~3,200万円と各々全漁業種類の約9割を占めていた。同期間におけるウスメバルの月別の平均漁獲量と平均単価を図4に示した。ウスメバルは3月(2.2 t)から漁獲され始め、4月(3.2 t)にピークを向かって7月(1.8 t)までは緩やかに減少した。8~9月は1 t以下に減少し、10~2月にかけては0.5 t以下で推移した。また、年間の平均単価は1,700~2,000円/kgであり、月別では8

表1 一本釣漁業者の漁獲対象種

魚種・月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ウスメバル			○	○	○	○	○	○	○			
ブリ				○	○	○				○	○	○
アマダイ	○	○	○						○	○	○	○
タチウオ						○	○					
タヌキメバル				※	※	※	※	※	※			
メダイ			※	※								
キダイ									※	※	※	※

○：主対象種 ※：主対象種との混獲

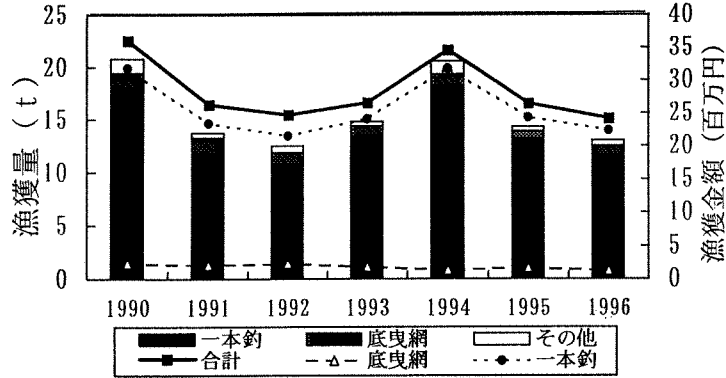


図3 ウスメバル漁獲量と漁獲金額

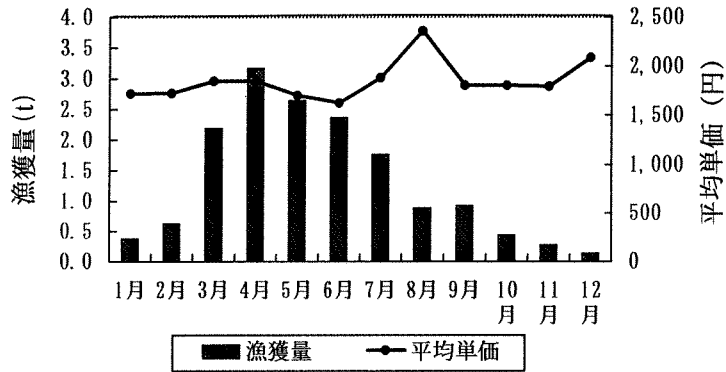


図4 月別漁獲量と平均単価 (1990～1996年)

月が2,400円/kgで最も高く、6月が1,600円/kgで最も安かった。

1990～1996年の主漁期におけるCPUEを図5に示した。近年では、1日一人当たり10～12kgで安定しているが、1970年代後期には1日一人当たり50kg以上であり、最大で120kg/日の漁獲があったようである。

まとめ

京都府のウスメバルは、1960年代後期まではそれほど重要視されておらず、他の漁獲対象魚種の主漁期以外に漁獲されていた程度である。これは、漁場も他の魚種に比べて沖合の水深100m以深と深く、礁に付いている魚群の中に正確に漁具を投入する高度な技術が必要であったことが一因であると考えられる。1970年代後期になると、漁船お

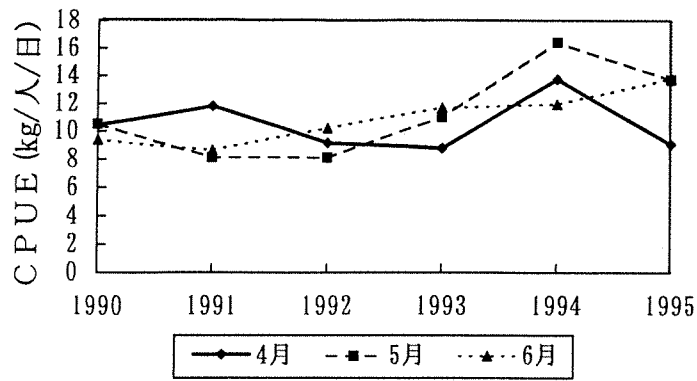


図5 主漁期のCPUE（蒲入漁協一本釣り）

よび魚探等の設備が充実してきた事に加え、それまで沿岸域で主対象となっていたブリ等の不振から、ウスメバルを主対象にする漁業者が増加して、近年では、高値で取引されるウスメバルは一本釣りの漁獲対象魚として非常に重要な魚種となってきている。さらに、ウスメバルは遊漁の対象魚種として注目され始め、漁場付近では漁船数より多い遊漁船が釣りをを行っていることもあり、遊漁による釣獲量は少なくないと考えられる。この頃からウスメバルに対する漁獲圧が高まり、資源の減少傾向が始まったのであろう。しかし、本種の資源量を推定する研究はほとんど行われておらず、現在でも漁獲量の減少傾向や魚体が小型化する傾向から、資源状況を推定しているにすぎない。

今後、ウスメバルの資源管理を進めていく上では、漁業

者のみならず遊漁による釣獲量も推定し、ウスメバル資源の動向を把握すると共に、本種の生態を十分に解明して資源管理方法を開発していくことが必要である。

文 献

- 鈴木智之・大池一臣・池原宏二. 1978. ウスメバルの年令と成長について. 日水研報告, **29**: 111-119.
- 涌坪敏明・村田真通. 1983. 青森県日本海沿岸におけるウスメバルの生態と漁業. 栽培技研, **12**(2): 1-11.
- 池原宏二. 1989. 対馬暖流域におけるウスメバルの生活様式. 日本海ブロック試験研究収録, 水産庁日本海区水産研究所, **15**: 71-79.